

平成 24 年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
第 1 回森林生態系・ニホンジカ保護管理合同部会
議事概要

◆日 時 平成 24 年 10 月 16 日 (火) 13:30 ~ 16:30

◆場 所 檜原市商工経済会館 7 階会議室

◆出席者

<委 員>

川瀬 浩	日本野鳥の会奈良支部 支部長
佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館 学芸員
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
高柳 敦	京都大学 講師
田村 義彦	大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長
鳥居 春己	奈良教育大学自然環境教育センター 教授
野間 直彦	滋賀県立大学 准教授
松井 淳	奈良教育大学 教授
村上 興正	元京都大学 講師

(以上敬称略)

<関係機関>

林野庁近畿中国森林管理局計画部計画課	上村 邦雄 企画官
林野庁近畿中国森林管理局箕面森林環境保全ふれあいセンター	中島 正彦 所長
奈良県農林部森林整備課	玉置 英隆 主査
奈良県くらし創造部景観・環境局自然環境課	山中 崇史 課長補佐
三重県農林水産部獣害対策課	谷崎 寧 副課長

<事務局>

近畿地方環境事務所	河原 武	統括自然保護企画官
	藤井 好太郎	国立公園・保全整備課長
	横田 寿男	野生生物課長
	川上 正重	国立公園・保全整備課課長補佐
	平井 和澄	野生生物課課長補佐
	安達 幸作	自然保護官
	七目木 修一	吉野自然保護官事務所自然保護官
	小川 遥	吉野自然保護官事務所自然保護官補佐
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志	環境部マネジャー
	樋口 香代	環境部リーダー
(財) 自然環境研究センター	千葉 かおり	主席研究員
	黒崎 敏文	主席研究員
	安齊 友巳	主席研究員

◆傍聴者 1名

◆議 事

- (1) 平成 24 年度森林生態系保全再生実施報告について
- (2) 平成 24 年度ニホンジカ個体群保護管理実施報告について

◆議事概要

1. 平成 24 年度森林生態系保全再生実施報告について

- (1) 平成 24 年度大台ヶ原森林生態系保全再生に係る取組内容について

　今年度の実施内容を説明した。委員からの意見等なし。

- (2) 大台ヶ原における今後の防鹿柵の設置箇所について

- ・ 今回は今後防鹿柵の設置が必要なものを全て洗い出したもので、設置については優先順位に沿って順次実施していく。抜けている箇所があるかどうかについては今後検討していく。また、優先順位の考え方として、コマドリの減少を考慮しスズタケの保護を優先した。(村上委員)
- ・ 設置候補地点⑪のシオカラ谷については、スズタケ枯死の要因はテングス病だということで調査をお願いしたところ、2007 年に 5 メッシュでテングス病が確認されていたと思う。テングス病でスズタケの枯死が進んでいる箇所に防鹿柵を設置することへは疑問がある。(田村委員)
- テングス病については、今年度ササ類のメッシュ調査を実施しているので、その結果を示します。シオカラ谷に過年度に設置した防鹿柵No.29、30 ではかなりスズタケが回復していることから防鹿柵を設置すればスズタケの稟高、被度が回復することが期待できると考えている。

(事務局 樋口)

- ・ 設置候補地点⑤の開拓分岐について、利用者に防鹿柵設置の効果を見せることが目的であれば、過年度に七ツ池に設置したNo.25 を見せれば良いのではないか。防鹿柵の設置については利用者への景観上の配慮をするという視点がなくなってしまっている。(田村委員)
- 防鹿柵の中を利用者に見せることについては、既存の柵の中をガイドをつけて見せるという考えも WG 等で議論しているものである。必ずしも新たにここに設置するというわけではなく、このような意見もふまえて検討していきます。(環境省 横田)
- ・ 設置候補地点⑨、⑩の名称として「滝見尾根に至るルート」という表現があるが、ここは「千石尾根」と呼んでいる場所である。(田村委員)
- 名称を「千石尾根」に修正すること。(村上委員)
- ・ 設置候補地点⑪(シオカラ谷) の説明箇所における記載の「H22 調査でコマドリが確認されていない」は奈良県の H23 調査でコマドリが確認されているため、「H23 調査でコマドリが確認されている」に修正してください。うまい具合に現在もスズタケが残っている場所にはコマドリが生息しているが、スズタケが枯れ始めたらすぐに対策を取れるようにお願いしたい。(川瀬委員)
- 急斜面のスズタケが残存している場所ではコマドリが生息しているが、周辺の緩斜面地ではスズタケが枯れ始めているため保全が必要である、というような表現に修正すること。(村上委員)
- ・ S、A、B といった緊急性のカテゴリー分けを一般向けにわかりやすく説明して欲しい。特に「S」は緊急性が高いということが納得できるように説明した方がよい。(高柳委員)
- ・ テングス病の発生とスズタケの衰退の因果関係については学術的な研究であり、この委員会で

は因果関係についてまでは議論しなくてもよいのではないか。（高田委員）

- ・ テングス病とスズタケ衰退の因果関係を明らかにするのは委員会の範疇を超えていっているとしても、モニタリングは実施しておいた方がよい。（村上委員）
- ・ 資料 1-2 について、指摘のあった箇所については両座長と事務局で修正を行う。（村上委員）

（2）大台ヶ原における今後の剥皮防止用ネットの実施箇所について

- ・ 単木保護や小規模防鹿柵などは簡単にできるので対策した方がよい場所では順次実施していく。単木保護は防鹿柵の設置ができない箇所やミヤコザサが繁茂している箇所で実施していく。

（村上委員）

（3）自生稚樹の保護手法について

- ・ 今回検討したのは自生稚樹の保護手法だけである。実際にどの場所でどの手法を用いるかについては適宜実施を進めながら考えていく。（村上委員）
- ・ 3 本の支柱による保護は林野庁で実施したことがあるが、囲うエリアが狭いと枯れてしまうこともある。4 本支柱で広く囲う方がよいと思う。全ての自生稚樹について、丁寧に保護して欲しい。

（田村委員）

- ・ 全ての自生稚樹を保護するということは重要なことである。（村上委員）

→ ご指摘のとおり自生稚樹は大事に保護していきます。（環境省 横田）

- ・ 防鹿柵 No.55 は No.16 とくっつけてしまえばこのエリアの稚樹が全て保護できるのではないか。

（田村委員）

→ 実施に関しては、現場を見ながら対応していく（村上委員）

- ・ 自生稚樹がここまで大きくなかった理由を考えること。そうしないと保護を行う理由にならない。倒木の間にあるものは大きくなっていることから、これと同じ状況を作り出すことにより自生稚樹を保護することができるのではないか。（高柳委員）

- ・ 自生稚樹も大きくなってくるとシカによる食害を受けるようになる。倒木などに囲まれているものは残っているが、それを超えて大きくなると食害を受け始めている。（村上委員）

→ ササの稈高を超えると食害を受けるようになる。（事務局 樋口）

- ・ ササの稈高を超えると食害を受けるといった過去の稚樹調査結果も示しておいた方がよい。

（松井委員）

→ 既存調査の結果も加えて修正してください。（村上委員）

（4）大台ヶ原における試験植栽計画（案）について

- ・ 地元小中学校が育てているものは、苗畑に移して育成し、今後移植するということでよいのか？

（野間委員）

→ 現在、苗畑にあるものを移植する。その後、小中学生が育てた苗木を苗畑に持っていく移植できる大きさになったら移植します。（環境省 安達）

- ・ 大きくなり過ぎて移植できなくなる前に移植するようにしてください。（野間委員）

・ 「今後植栽は行わない」という方針と、「小中学生が育てたものは移植する」という方針は整合性がとれていない。小中学生が育てたものを移植して終了する、という書き方にしないとおかしい。

（鳥居委員）

- ・ 子供達が苗木を育てて行くということを今後は一切行わないのかどうか、議論していく必要がある。（高田委員）

- ・ 小中学生が苗木を育成していくのかどうか、ということについては重要な問題なので今後も議論していく必要がある。(村上委員)
 - ・ 小中学生の先生も含めて検討していくべきである。(鳥居委員)
- 「既存苗木」の中には小中学生が現在育てている苗木も含めており、今後、小中学生が新たに苗木育成を行うかどうかについては、「植栽のため」という位置づけではなく、別の教育目的という考え方もあるかもしれないと考えている。(環境省 横田)
- ・ 学校側の受け入れ体制がどうか、という問題もあるが、自然再生の協働という可能性はおいておく必要がある。こちらから今後は行いません、と持ちかけるのはおかしいのではないか。

(松井委員)

- 現時点では小中学校側から今後は苗木の育成や植栽などを授業のカリキュラムの中では難しい。という意見を受けての検討結果だったと思う。今後は地元に自然再生について考えてもらえるような授業をイベントで実施していく必要がある。(村上委員)
- ・ この資料では植栽に対して否定的な書き方になっているので、実際にイベントで植栽を行った子供達にも配慮した表現にしてください。(野間委員)
 - ・ イベントで呼びかけた側の責任についてはちゃんと考えておくべきである。この委員会では今後植栽を続けるのか、やめるのか、ということについてはっきりとしておく必要がある。(田村委員)
 - ・ 国有林側では今後も植栽を検討している。環境省側は既存の苗木は植栽に利用するが、今後は野生稚樹の保護を中心に考えていくという方針だと思うが、長い目で見て植栽を今後一切実施しないということではないと思う。(高田委員)
 - ・ 植栽という行為はやめる。しかし、既存の苗木は活用するという方針である。しかし、今後小中学生が苗木の育成を行うかもしれないことを否定するものではない。(村上委員)
 - ・ 今年の方針としてはよいと思う。しかし、今後この方針に環境省が縛られていくということではないと思う。(田村委員)
 - ・ 植栽イベントなどに参加した人たちのことに配慮する必要はある。あなたたちが育てたものは今後こうなっていきますよ、ということは示していく必要がある。(高柳委員)

(5) 上北山村におけるイベント及び地元勉強会について

- ・ この項目については、今年については報告という形にする。来年度は企画段階で検討をしてほしい。(村上委員)

(6) 鳥類テリトリーマッピング調査について

- ・ 今回示されたデータがルートセンサスによる調査結果も含んでいるのであれば、表題を修正してください。調査結果については、今後の希望が持てる結果であると思う。テリトリーマッピングについて、1個体しか確認されていないものの取り扱いはどのようにになっているのか。(野間委員)
- 今回の調査結果は、テリトリーマッピングの調査結果をルートセンサスの調査結果としても使えるようにしたものであるので、表題はこれでよいと思う。1個体しか確認されていないものは鳴き交わしによるテリトリリーの判断は難しいものではある。(事務局 黒崎)
- ・ 調査方法の説明をわかりやすく示してください。(村上委員)
 - ・ コマドリが1個体だけ確認されているが、今回議論するのは待って欲しいということで、資料では出さないようにお願いしたが、ルート6でコマドリが確認された場所だけでも示してもよいと思う。(川瀬委員)

- ・ コマドリの確認場所の情報については、表に出すと写真家が踏み込むなどの生息への影響が懸念されるので表に出さない方がよい。(村上委員)
- ・ 資料 1-2 におけるコマドリの確認情報の示し方についても配慮しておく必要がある。(野間委員)
- ・ 資料に示された過年度調査結果との比較については、本来は今年度実施した全てのルートの調査結果を示して、過年度のデータがあるものについて抽出して比較するという形に修正してください。(村上委員)

2. 平成 24 年度ニホンジカ個体群保護管理実施報告について

- (1) 平成 24 年度大台ヶ原ニホンジカ個体数調整業務及びモニタリング調査の内容について
今年度の実施内容を説明した。委員からの意見等なし。

(2) 大台ヶ原ニホンジカ個体数調整について

- ・ 装薬銃による個体数調整について、目撃に対して捕獲が少ないが、捕獲効率を上げるにはどうしたらよいか。(村上委員)
- 今年の手法は車の中から確認し、見つけたら車から降りて撃つという手法である。エサ場で待ち伏せして撃つなど手法については獵友会と検討する。(事務局 黒崎)
- ・ ドライブウェイを閉鎖して、車から直接撃つといったやり方も検討して欲しい。知床ではこの方法をやっている。ドライブウェイの閉鎖期間中なら可能ではないか。(村上委員)
 - ・ ぐくりわなの捕獲効率については、6月以降効率が上がっているのは個体数が増えてきたため効率が上がってきているのではないか。実施時期を検討して費用対効果を上げるのは重要なことである。(村上委員)

(3) A I センサー付き囲いわなを用いた新規捕獲手法の実証試験について

- ・ 少し慣れてくるとシカがわなに入ってくるということが示されている。最大何頭わなに入ったら入口を落とすのかということは決めているのか？(村上委員)
- コンピューターが自動で設定することも、こちらでデータを見ながら決定することも両方できるようになっている。(事務局 黒崎)
- ・ A I センサーの設置箇所が示されていないのは意図的なのか？(田村委員)
- 意図的に示していない。(村上委員)

(3) 持久的誘引餌を用いた新規捕獲手法の実証試験について

- ・ 今のところ、ツキノワグマは確認されていないということ。この手法でうまく行くようであればグラニュー糖を用いた餌が良いということになるが、秋以降の結果を持って最終判断をする。
(村上委員)
- ・ ツキノワグマが誘引されなかった、と書くと誤解を受ける。ここではツキノワグマが少ないため誘引されなかったが他の地域では誘引される恐れがあることを示しておく必要がある。
(高柳委員)

3. その他

- ・ 防鹿柵が壊れたところからシカが入り込んでいることへの対策も検討すべき。柵を作ったから安心ということではなく、管理についても検討しておく必要がある。(佐久間委員)
- ・ 防鹿柵の管理については適切に実施しているが、壊れた場合に即対応することが必要。(村上委員)
- ・ A I センサーは防鹿柵の管理には使えないのか？また、一度A I センサーでわなの入口を落とすとシカが警戒するようになるが、その後どれくらいでまたシカが入るようになるのかといった課

題もある。(佐久間委員)

- ・ 費用対効果を考えることは大事であるが、お金に換算できないものをどのように考えるのか、といったことも重要である。わなの効率が落ちるのは個体数調整によって個体数が減ったからという理由をしっかりと説明しないと効果が落ちたと誤解を受ける。成果については外に示していくことが大事。自然再生で行っていることを一般の人にどう伝えていくのか、イベントの内容については利用部会でも考えていくべきである。(村上委員)
- ・ 今後の予定は第2回合同部会を2月、評価委員会を2月下旬に予定している。(環境省 安達)

以上